４　地平と南方文学

古谷　明希歩

地平と南方文学について考えるならば、地平の青年時代から振り返る必要がある。南方とは「台湾など、戦時中の日本の植民地」と「宮崎を含む九州南部を中心とした地域」の二つを、南方文学とは、当時の植民地や九州南部の明るく素朴な雰囲気の文体で書かれた作品のことを指す。

地平と南方文学が出会うきっかけは、佐藤春夫の作品だった。佐藤春夫は 1920（大正９）年頃に台湾へ赴き、台湾からの強いインスピレーションを受け、「女誡扇綺譚」「魔鳥」などの作品を書いている。台湾への興味を刺激された地平は、不安定だった精神の療養という目的もあり、1926(大正 15)年、18 歳の時に、台湾総督府立台北高等学校高等科に入学した。結果、南国台湾は都会生活で傷付いた地平の「心のオアシス」となった。

そして、大学時代を経て発表した「熱帯柳の種子」から、地平の文学活動は始まった。その後、地平は「土竜どんもぽつくり」「南方郵信」を発表し二回とも芥川賞にノミネートされたことで、台湾の影響を強く受けた作家だと認識された。また、実際に台湾を旅して書き上げた「蕃界の女」「霧の蕃社」「長耳国漂流記」などを発表し、その作家としての地位を確固たるものにした。

しかしその後、1941（昭和 16）年に地平は「徴用作家」として南方へ派遣され、戦争中に日本語普及や戦意高揚などを目的とした文章を書くことになった。そこで地平は、マレー半島やシンガポールに派遣され、その占領地で旧日本軍が現地民に対して行った虐殺等の蛮行を見てしまったらしく、南方文学への憧憬の念は失われてしまった。

徴用後は風土的・牧歌的な雰囲気の文体がほとんど見られなくなり、地平独自の「私小説」へ変化を遂げた。その変化の大きさは、図書館長の職に就いたまま休職していた時期（1948（昭和 23）年～）に発表された作品が「従来の地平の文学の系譜からすれば理解にくるしむ」（注・1）と言われていることからも推し量ることが出来る。

地平は自らの文学の指標として、南方文学の樹立を掲げていた。その頃（1930 年代）の日本文学は「安手な都会主義か深刻癖のつよい心理主義ひといろに塗りつぶされてゐる」（注・２）と、最盛期の地平は述べる。そして南方の持つ、明るく牧歌的で、神秘性を孕んだ雰囲気は、日本文学に新しい風を吹かせると考えていたようだ。

しかし、南方には闇の面もあった。当時の南方（台湾）は前述のとおり、日本の植民地であった。つまり南方について研究するということは、国にとって「いかに東亜（日本の勢力）に現地の人々を引き込むか」と考えることでもある。時代背景によって、地平が愛してやまなかった南方を、ある意味破壊するために行われていた研究もあった。

満州事変や五・一五事件、日中戦争、第二次世界大戦など、世界中が争いに包まれ、人が徐々に獣のようになる時代に地平は生きていた。だからこそ地平は、人間本来の原始的な尊さや素朴な心を求め、明るく牧歌的な雰囲気を持つ南方へと思いをはせたのだろう。そして南方文学を確立させることで、暗く荒れた人々の心に温もりを取り戻させようとしていたのでは、と考える。

引用文献
１．岡林稔著『《南方文学》その光と影　中村地平詩論』鉱脈社，2002 年，p. 253-254
２．中村地平著『仕事机』筑摩書房，1941 年，p. 247

参考文献
長嶺宏著『回想の文学』本多企画，1997 年，p. 304-306
宮崎市教育委員会編『中村地平と南方文学』宮崎市教育委員会，2003 年
岡林稔著『《南方文学》その光と影　中村地平試論』2002 年